

## 森と川の民の交流考古学 先史狩猟採集社会と農耕社会の相互関係史

小川英文

### はじめに

東南アジアの熱帯雨林に生活する狩猟採集社会と農耕社会との間に今日見られる、食料や労働力の交換関係は広く知られており、こうした状況を具体的に究明しようとする試みも古くから続けられてきた。しかし考古学ではこれまで、狩猟採集社会と農耕社会が隣接し、交流を互いに保持しながら長い間生活し続けるという状況をほとんど想定してこなかった。考古学が想定してきた人類史は、特定の社会が技術革新によって新たな段階を踏み出したとき、最新の技術は迅速に周辺に伝播し、広範な領域で新たな生業や社会の段階を迎えるというものであった。

しかし輝かしい人類史の裏面で、狩猟採集社会は農耕開始以降、歴史にほとんど登場しない。古い技術段階に留まる人間集団は、文明史のなかでは一瞬にして過去の人びととなった。農耕社会とともに生きてきた狩猟採集社会の歴史は考古学の議論の枠外に追いやられたかのようである。こうした研究状況のなかで先史狩猟採集社会と農耕社会の相互関係に考古学的にアプローチするには、これまで農耕の開始や複雑な社会への発展過程の研究などで生み出されてきたモデルを参照しながら、二つの社会の相互関係について新たなモデルをつくり、さらに発掘資料によって検証、修正する作業が必要である。

### 一 相互依存関係の歴史的深度

まず東南アジアにおける狩猟採集社会と農耕社会の同時存在の問題が今日までどのように議論されてきたのかを知るために、三つのモデルをふり返ってみよう。

#### 隔離モデル

この問題を重要な課題として認識した最初の研究者はハイネ・ゲルデルンであった(Heine Geldern 1932)。当時、東南アジアの文化発展についての西欧人の解釈は、文明の光の届かない土地では過去から現在までを通じて文化が停滞していたというものであった。こうした通俗的解釈に対してハイネ・ゲルデルンは、技術段階の異なる集団が「モザイク状」に混在する東南アジア諸民族の多様性に対する説明として隔離モデルを提示した。東南アジアにおける狩猟採集社会は長期にわたって外部から隔離されつづけた結果、農耕社会に同化・吸収されることなく狩猟採集社会が存続してきたという説明である。その後長い間、狩猟採集社会と農耕社会が同時に存在することは隔離モデルによって説明されてきたが、七〇年代になると文化生態学的アプローチによって、新たに交換適応モデル(exchange adaptation model)が提示されるようになった(Peterson and Peterson 1977)。

#### 交換適応モデル

ピーターソンらはフィリピン、ルソン島北東海岸パラナン(Palanan)の狩猟採集民マゲタ(Magta)と低地農耕社会とのあいだにみられる食料、土地、労働力などの交換を軸とした社会的関係について民族調査を行い(Peterson 1978)、先史時代から現在までの両者間の交換が狩猟採集社会の存続を助長した

と説明している。ピーターソンらが注目したのは、アグタ社会と農耕社会の食料交換によるエネルギーの相互補完性である。パラナン・アグタのほとんどが炭水化物の七〇～一〇〇%を農耕民に、そして農耕民の三分の二がタンパク質の三〇～五〇%をアグタに依存している。また土地と労働力も交換の対象となっており、アグタの焼畑を農耕民が利用する場合や、植付けと収穫作業にアグタが労働力を提供する場合、農耕民は農作物や現金をアグタに支払っている。ピーターソンらはこうした両者間の交換の実態を過去にもさかのぼらせて、技術的背景が異なる集団が、それぞれの技術を用いて資源を利用し、互いに競合せずに不足する面を補い合い、結果的に二つの集団がともに適応を果たして今日に至ったという、交換適応モデルを提示したのである(図一)。このモデルがハイネゲルデルンの隔離モデルと大きく異なるのは、過去から現在にいたるまで狩猟採集社会がつねに農耕社会と交流をもっていたとすることである。そして狩猟採集社会は農耕社会に包括されることなく、また労働投下量を低く抑えることによって、技術革新をことさら推し進める必要もなく、集約化や膨張を免れることによって、今日まで存続が可能となったと説明したものである。

しかしこのモデルも批判の余地がある。先史時代から現在までの長い時間にわたって、二つの社会が技術レベルをもとに低くとどめておけるほど、安定した状態を維持することが可能かという疑問である。またピーターソンらはアグタ社会と農耕社会の二者間のみ閉鎖系をモデル化しただけであって、外界との関係の連鎖を想定してはいない。交換を軸として正のフィードバック(集約化を抑えた交換適応モデルは、あまりに安定的・静的で、外部からの変化の誘因を想定していない点では、かたちを変えた隔離モデルということもできる(小川二〇〇〇))。

### 否定された森の民の自立性

八〇年代後半には、先史時代における狩猟採集社会の自立性をめぐって、熱帯雨林におけるカラハリ論争ともいふべき議論が行われるようになった。フィリピン、ルソン島北東部のカシグランで調査を続けてきたヘッドランドは、熱帯雨林での狩猟採集社会の自立性に対して疑問を唱え、言語学、考古学、そして炭水化物食料の欠乏という観点から検討した。結論として、熱帯雨林では現在と同様に先史時代においても、自立的に生業を営むことは不可能であり、アグタなどの狩猟採集社会は少なくとも今から三〇〇〇年前には、現在知られているような農耕社会との相互依存関係を確立していたという仮説を提示した(Headland and Reid 1989)。

この仮説を補強するために、ヘッドランドは言語学者のリードとともに狩猟採集社会と農耕社会の相互関係の歴史がどれくらい古さをもっているか歴史言語学の立場から検討している。アグタなどの狩猟採集民は、現在すべてオーストロネシア語を話している。低地農耕民もオーストロネシア語を話すが、両者の言語は互に通じない。これはかつてアグタが農耕民であるオーストロネシア語族との接触や交流において、自らの言語を捨て、オーストロネシア語を受け入れたものの、その後分化して個別に変化したことを示唆している。両者の密接な関係が途絶えた後、アグタの言語は別個に変化のプロセスをたどり、現在のかたちとなったが、このプロセスには言語学的に三〇〇〇年以上の時間が必要であると考えられている(Headland and Reid 1989: 46)。

またさらにヘッドランドは熱帯雨林ではタンパク質よりも炭水化物食料の獲得が困難であることを根拠として、農耕社会との社会的・経済的関係なしに、先史狩猟採集社会が熱帯雨林へ進出することは不可能であったという仮説を提唱している。熱帯雨林は豊富な日射量と高温・多雨という気候条件によって、膨大な生物量や生産量と種の多様性を誇っている。しかし栄養の分解・摂取・循環のサイクルが非常に速く効率的に行われるシステムであるため、人間が食用できる果実・葉花などの再生産器官の生産に、栄養が十分に分配されていない。しかも再生産器官は高い樹冠の上に位置し、そのうえア

ルカロイド、タンニンといった毒やトゲで防御されている。そして植物の栄養分の多くは木質部に蓄えられ、地下の根にもわずしか蓄えられていない(Hutner 1982: 121-2)。さらに、種の様性は食物利用の可能性を広げているようにみえるが、一定の範囲内で同一種が分散して互いに距離をおいているため、利用の際にはかなりの距離を移動しなくてはならない。このように熱帯雨林に存在する炭水化物を人間が利用するには大きな困難を伴うことから(Hutner 1982: 135)、ヘッドランドは先史狩猟採集社会の熱帯雨林への進出が、農耕社会から炭水化物食料を得ることによって成立したとする仮説を提唱したのである。

北部ルソンの考古資料によってこの仮説の歴史的深度を確認すると、農耕社会の存在を暗示するコマの最古の年代が三四〇〇年前(Snow et al. 1986)、土器の出現が約四〇〇〇年前(小川二〇〇四)である。言語学と考古学の資料も同じく、ヘッドランドらはアグタと低地農耕社会との相互関係が少なくとも三〇〇〇年前には始まっていたものと考えている(Headland and Reid 1989: 46)。

これらの仮説を提示した後にヘッドランドは、アマゾンでの研究で同様の仮説を提唱したベイレーとともに、先史狩猟採集社会の自立性の是非を問うシンポジウムを開催した(Headland and Bailey 1991)。しかしこのシンポジウムでは、熱帯雨林では現在でも周囲の農耕社会から自立した狩猟採集社会は存在するという意見が多く、二人の仮説には否定的であった。ヘッドランドらと反対者との議論は、ちょうど同じ頃、カラハリ砂漠の狩猟採集社会研究で白熱していた「伝統主義vs修正主義」論争と争点を共有しているともいえる(池谷二〇〇二)。反対者たちは各々のフィールドで、炭水化物の生産量と獲得・摂取の実態や、考古学、エスノヒストリーの資料を再検討した結果、以下の否定的見解を述べている。

1. 熱帯雨林での生態学的調査例が少なく、ヘッドランドらの仮説の前提自体が、資料不足により検討の余地がある。
  2. 現在も過去においても、熱帯雨林の狩猟採集民は農耕民との関係なしに自活している。
  3. 仮説を支持できるほど、交換の民族例自体が十分ではない。
- 両者の意見が真つ向から対立する結果となってしまったが、それは議論の基礎となる資料の絶対的不足に起因している。あらためて考古資料の増加による仮説の検証、議論の深化が再確認された。

### 外に開かれた相互依存関係

このような論争のなかで、筆者は相互依存モデルの可能性を考古学的に検証してみようとする立場にある。異論が多いにもかかわらず、依然としてアグタ社会と農耕社会との相互関係が先史時代に溯る可能性も否定できない。そこでヘッドランドの仮説をもとに、先史時代における両者の相互関係の考古学モデルを図示すると図2のようになる。食料や労働力の交換についてはピーターソンのモデルと変わりはない。しかしそこにヘッドランドが提示した自立性への疑問を発展させると、二者による閉鎖系から、より外部へと開かれたモデルを想定しなくてはならない。狩猟採集社会、農耕社会ともに外部との血縁、友好関係のネットワークを通じて、物資や情報が流入してくる。その結果、両者それぞれが社会関係の再生産を繰り返し、社会構造の変化を歴史的に経験しながら、より複雑な社会へと変化する。階層化などの社会構造自体の変化を経験し、農耕社会にはより多くのモノと情報が流入するようになつたであろう。それにもとない隣人である狩猟採集社会もその影響を直接受けてきたに違いない。しかし農耕社会からの影響はアグタの社会構造そのものを大きく変化させることなく、今日に至つたものと想定できる。

カラハリ論争と同様に、モデルを検証し、さらに議論を深めるには考古学資料の欠如はあまりにも大きい。仮説検証の責務は考古学にゆだねられている。そこで以下では、2つの社会がはじめて出

会った際にどのような社会的変化が迫られたかについてのモデルを模索する。

## 二 狩猟採集社会と農耕社会の最初の出会い

先史時代における狩猟採集社会と農耕社会という、生業と社会組織の形態が異なる二つの社会が近接して生活する場合、これらの社会の接点では互いの社会が必要とする食料や資材が交錯する。それはまず両者が平地と山地という特定の環境に居住しており、それぞれのテリトリー内において特定の資源が偏在することに起因している。資源利用のあり方を左右するテリトリーの境界線が、両社会間である程度まで固定化され、資源利用の役割分担が明確化するには、友好的な交流から戦争にいたるまで、平和と対立の出会いが繰り返されてきたにちがいない。そしてそのような出会いが度重なった結果として、それぞれの社会の内部で、それまで利用してきた物質的資源の生産と、保持されてきた社会関係の再生産のあり方に大きな変化がおとずれたであろうことは容易に想像できる。しかしそのような人間行動の軌跡は遺物として残されていないため、見えない部分を想像によって埋める作業が必要である。その際、社会を変化へ導いたと考えられるさまざまな社会的ファクターを検討して、起こりえたであろう最も妥当なモデルを作り出す作業が必要である。そのための手がかりとして、以下では狩猟採集社会と農耕社会との相互関係がはじまる、両者が接触した時点についての考古学モデルを検討してみたい。

### ヨーロッパへの「先進の波」

先史狩猟採集社会が、居住地選択、資源分布の中心、利用可能な資源分布域(catchment area)などについての情報の収集と交換、処理、分配、共有をどのように行っていたかについては、これまで考古学で十分に議論されてきたとはいえない(Moore 1986: 10)。こうした研究状況は狩猟採集社会と農耕社会との集団関係においても同様である。これまで考古学が想定してきた狩猟採集社会と農耕社会とが接するフロンティアは、いち早く食料生産を開始した技術的先進集団が拡散を開始し、それまでそこで生活してきた狩猟採集社会のテリトリーを一方的に侵略、占拠するというシナリオが一般的であった。先進集団は農耕の技術力と生産力によって徐々に人口を増加させ、それによって支え切れなくなった余剰人口が母集団から分離して新たな集団を形成し、周辺へと拡散して行く。拡散によって農耕社会は、それまで狩猟採集社会が資源を利用してきた領域を占拠し、狩猟採集社会を農耕社会へと包摂しながら農耕を伝播させて行ったと考えるのが一般的であった。

東南アジアの熱帯雨林から遠く離れた話になるが、ヨーロッパにおける農耕社会拡散のシナリオでは、西アジアから西漸をはじめ、三〇〇〇年の間にバルカン半島からブリテン島とイベリア半島までのヨーロッパ全土に広がって行ったと考えられてきた「先進の波(Wave of Advance)論」(註1、Ammerman and Cavalli-Sforza 1971)や三〇〇〇年という農耕伝播のスピードは考古学者によって速いと解釈されてきた。いったん農耕の痕跡が発見されると、研究の関心は農耕社会の発展に移り、農耕以後の狩猟採集社会というテーマの研究が行われることはなかった。「先進の波」のなかで狩猟採集社会は進出する農耕社会に対してなんらの抵抗も示さず、植民地化されてしまったかのように考古学の議論から姿を消して、その後の農耕社会の発展のみが研究対象となった。

### 接触のかたち

先史狩猟採集社会が一方的に農耕社会へと飲み込まれていったかのようなイメージを抱かせるヨ

ロツパ初期農耕伝播論に対してデネル(Deniel 1985)は疑問を唱え、両者のさまざまな接触の可能性を、考古学データと照合しながら検討している。デネルは考古資料の分析から両者の接触形態を図3のように想定している。両者の交流のあり方が積極的なものである場合は、狩猟採集社会が農耕技術を積極的に習得して農耕社会へと同化するか、あるいは農耕社会が一方的に狩猟採集民を排除し、テリトリーを占拠するよつな事態が想定できる。いつぼつ両者が互いに関心をもたない消極的な交流の場合には、まったく接触をもたないか、あるいは消極的であるが、物資の交換をおこなうよつな相互関係を想定した。

デネルは考古資料の検討によつて、当時、狩猟採集社会と農耕社会のフロンティアで最も可能性が高い接触形態は、共生的、寄生的のいずれにしろ両者間に物資が往来する交流のタイプだが、積極的に農耕社会を受けいれたり、あるいは農耕社会に一方的に包摂されるよつなものではなく、消極的な交流だったと予測している(Deniel 1985: 136)。狩猟採集民のテリトリーに移住してきた農耕社会は、すぐに狩猟採集民の注目的となったであろう。そして農耕社会への最初の接触は狩猟採集民の側から行われた可能性が高い。定住生活を続ける農耕民よりも行動範囲の広い狩猟採集民のほうが、農耕民の生活様態をより注意深く観察できたであろう。そして農耕民がもつ石器、磨製石器、農作物や家畜には狩猟採集民も大きな関心を寄せていたと考えられる。同時に農耕社会は生産の集約化のため、必然的に労働力を必要としていた。それゆえ消極的ではあるが、両者の交流はまず物資と労働力の交換をおして開始されたと考えられる。このような緩慢な交流を通じて、狩猟採集民は必要に応じて農耕技術を習得したであろう。そしてデネルは、「先進の波論のように狩猟採集社会が決して急激に農耕社会へと変化したのではなく、地域差はあつても緩やかな移行であつた」という見解を述べついで(Deniel 1985: 136)。

実際その後の考古遺物の検討により、中石器時代に狩猟採集民が使用していた石器製作技法やクマなどのシンボルには、農耕社会になつても継続性が認められるといつと指摘もある(Zvebil and Zvebil 1988)。狩猟採集社会から農耕社会への移行期において考古遺物に認められる継続性が暗示するものは、決して狩猟採集民の住む地へ農耕社会が植民したといつものではなく、フロンティアにおける両者の漸進的な交流によつて、狩猟採集社会が徐々に農耕を受け入れていくといつシナリオである。

### 初期接触と移動コスト

つぎに資源利用のための情報確保の観点から議論を進めたい。狩猟採集社会の資源利用のあり方に直接影響していると考えられるのは遊動性と居住地の選択である。農耕社会との接触を契機として、先史狩猟採集社会の遊動性と居住、そして資源利用のあり方に大きな変化が起こつたと推測できる。ある集団は周囲の資源分布についての情報とそれらを採用するための移動計画に必要な情報を常に収集している。狩猟採集社会間に限定しても、他集団との移動や居住についての情報交換が不十分だと、居住地と利用可能な資源領域が他集団と重複することとなり、移動を余儀なくされるため、その分のコストがかさむことになる。そこへさらに農耕社会が登場し、情報が不足するとその分、大きなコストがかかる。

狩猟採集社会の居住と遊動のパターンは生態的・社会的環境についての知識をベースとしているが、それが農耕社会の出現によつて大きく攪乱されることとなる。このことは生業活動と資源分布に関する情報を有機的に統合する社会関係を直接脅かすことを示している。農耕集団がさらに増えつづければ、狩猟採集社会が直面する状況はより複雑となる。こつした複雑な状況下にあつて、資源確保により有利な、よりコストの低い居住地の選択と移動パターンを決定するためには、他集団の生業活動パ

ターンについての情報収集が死活問題となる。農耕社会が登場する以前であれば、他の集団についての情報は、狩猟採集社会間で結ばれていた親族関係や友好関係をもとにした社会的ネットワークを通じて入手してきた。しかし農耕社会出現以降は、彼らとのあいだにも円滑な社会関係を結び、生業活動のコストを下げるための情報を確保することが重大事項となっていたと予測できる。

このような情報とコストの問題についてモアは、先史狩猟採集社会と農耕社会が出会うフロンティアにおいて、互いに移動情報が交換されない場合のコストについてシミュレーションを行っている(Moore 1985)。まずコンピュータ上に資源分布が均一な架空の資源領域を作る。集団間には情報交換がないものと仮定し、各集団がランダムに占拠するものとする。他集団と占拠が重複する場合は他の場所に移動しなければならぬ。そしてこの移動はコストとして換算される。また狩猟採集社会は季節的に移動するが、農耕社会は定住しているので移動のコストはかからないものとする。

まず最初に狩猟採集社会のみがこの資源空間に存在する場合を想定してシミュレーションを行った。その結果、資源空間全体の半分も占拠していない場合でも、占地重複で移動しなくてはならない事例が急増した。これは人口密度が低く抑えられていて、同じ資源領域を共に利用する集団が比較的少ない場合でも、情報交換がない場合には移動のコストは大きくなることを示している。

つぎにこの領域に農耕社会を登場させてみる。農耕社会は定住しているために居住地の移動がない。その分、狩猟採集社会の占地重複も低く抑えられると期待できる。しかしシミュレーションの結果は占地重複と移動コストが増加することには変わりがないというものであった。これは農耕社会が出現しても資源と居住の情報が十分でなければ、狩猟採集社会には移動コストが増加することを示している。

### 社会的資源としての農耕社会

このシミュレーションでモアが指摘する重要な点は、農耕社会の出現による先史狩猟採集社会への影響が、単に居住・資源空間だけではなく、狩猟採集社会間に存在した、生業と社会的紐帯についての情報の質や量、そしてネットワークのかたちにまで及んでいたという点である(Moore 1985: 105)。その影響はなによりも狩猟採集社会の移動コストを抑えるための社会組織上の変化として現れる。狩猟採集社会には、移動性を減少させるような情報処理能力の高い社会組織とネットワークの改編が求められることになる。現実にはこのような社会組織の改編は、季節的な構成員の離合集散によって資源と居住についての情報が集められ、その情報の分析をもとにしてコストの低い移動が繰り返し検討され、実践されることによって可能となる。そして情報処理能力を高め、的確な移動計画を決定することが移動コストを下げることに繋がっていく。さらに農耕社会との関係において狩猟採集社会が移動コストを下げられるとすれば、それは社会的資源として農耕社会をどれだけ利用できるかにかかっているだろう。

この実践の一例が両者間での肉などのタンパク質食料や労働力とコメ、イモなどの植物性食料との交換である。熱帯雨林における炭水化物生産量の低さを考えると、この交換は確かに移動コストの減少へとつながる。しかしこの交換は狩猟採集社会の平等原理にもとづく交換ではないため、社会的紐帯の再生産のあり方に大きな変化をもたらしたであろうと想像できる。また炭水化物の交換によって、植物採集という性的分業からある程度解放された女性の役割が大きく変化したであろうことも見逃すことはできない。しかし採集活動から開放された分の労力はどこへ配置転換されたのだろうか。現在のカガヤンのアグタには、女性が矢を所有し、狩猟パーティに参加するという事例が見られるが、これも交換によって引き起こされた女性労働力の再配置の一例とも考えられる。

さらに大きな関心事は、両者の関係が不平等なものへと変化していくプロセスについてである。今

日の周辺化されたアグタ社会の状況とは異なっていたであろうが、狩猟採集社会が交換財としての肉<sup>7</sup>を確保するために熱帯雨林へ進出する理由には、歴史の過程のなかで農耕社会によってパトロニックライアント関係に陥れられたことを想定する必要がある。狩猟採集社会にとって農耕社会が社会的資源として重要であるとするれば、両者の関係が政治経済的に不均衡な状態に移行した原因についても、交換関係の深化が関わっていたものと考えられる。

### 社会的・政治的關係が保障する生業活動

ヘッドランドが指摘するように、先史狩猟採集社会による熱帯雨林への進出が農耕社会からの炭水化物食料の供給を得てはじめて可能であったとすれば、農耕社会は狩猟採集社会からの森林資源の見返りを期待して、さまざまなサービスを提供したであろう。農耕社会にとっては肉の確保のほかに、労働力の確保や農地の拡大は死活の問題である。こうした農耕社会の需要に狩猟採集民を動員しつづけるための見返りの提供は炭水化物食料のみではなかったはずである。

さらに農耕社会が提供するサービスのなかで両者の政治経済関係の変化に影響を与えるのは、狩猟採集社会間の紛争調停である。農耕社会との交換によって炭水化物食料の供給が可能となった狩猟採集社会は、熱帯雨林を生業活動の中心的な場とするようになったが、そこで新たな資源獲得競争がはじまり、狩猟採集社会間での紛争が起こる。紛争はこれまでどおり狩猟採集社会間の儀礼的ネットワークのなかで調停・解消される場合もあったであろうが、森林資源獲得の利害が絡む農耕社会が調停に乗り出したと考えるほうが妥当であろう。狩猟採集社会間の紛争は同時に農耕社会間にとっても生業上の大きな問題であるため、この調停には農耕社会間での利害の調整も必要であったと考えられる。

狩猟採集社会の熱帯雨林での紛争解決と円滑な活動の保証は、狩猟採集社会の移動コストばかりでなく、農耕社会の生業活動のコスト削減にもつながっている。そして農耕社会の紛争処理能力に対する狩猟採集社会の依存度が増すにつれて、狩猟採集社会の農耕社会に対する負債も増加し、徐々に両者間にパトロニックライアント関係が構築されていったと推測できる。こうして狩猟採集社会の生業コスト削減は、結果的に農耕社会への政治的依存状態を生み出すこととなり、その後、両者間の社会的不均衡が常態化していったものと考えられる。

### 三 ラロロ見塚群における初期接触

デネルが先史ヨーロッパの考古資料から提示した狩猟採集社会と農耕社会の緩やかな交流のモデル、そしてモアが情報とコストの観点から導き出したような、狩猟採集と農耕の二つの社会における相互関係のモデルは、どのように検証可能であろうか。両者間の交換は遺物の出土状況を複雑なものにしている。剥片石器の出土をもってその遺跡を即座に狩猟採集民が営んだものとは断定はできないからである。

遺跡の担い手を判断するには単独の遺跡の発掘資料だけでは十分でない。地理的に限定された領域のなかで、広範に分布する遺跡全体の変遷を時期ごとに明らかにし、各遺跡から出土した各時期に属す遺物の種類と量、そしてその変化を追うことによってはじめて遺跡の担い手を判断する材料が揃ったこととなる。ある時代の人間行動の全体を網の目とすれば、ひとつの結節点がひとつの遺物、あるいは遺跡だと考えることができる。情報やモノもその網の目を通して生産・交換され、消費・廃棄される。このように遺物や遺跡全体に人間行動の網の目を仮構し、それらの分布パターンや時代的变化を総体的に捉えようとする方法は空間考古学(Settlement Archaeology)と呼ばれているが、狩猟採集社会

と農耕社会の關係のモデルもこの方法に依拠することによって検証作業に踏み出すことができる(小川 1996)。

### 森の民の足跡

狩猟採集社会と農耕社会の相互關係の歴史プロセスを明らかにするために、筆者はこれまでフィリピンの北部ルソン島カガヤン川下流域五〇キロメートルに分布するラロ貝塚群の調査を継続してきた。ラロ貝塚群の遺跡分布は、カガヤン川兩岸の河岸段丘上を中心に貝塚遺跡が立地し、後背地の石灰岩丘陵地帯には洞穴遺跡が分布するという状況にある(図4)。発掘調査の結果、二〇ヶ所以上の貝塚遺跡から出土した土器群は四〇〇〇年前から一〇〇〇年前までの四つの時期に編年することが可能となった(小川二〇〇四)。また四つの土器群の前後に土器出現以前の剥片石器群を出土する時期と貿易陶磁の時期を加え、ラロ貝塚群全体の遺跡は第一期から第六期までに編年される(図5)。狩猟採集社会と農耕社会の初期接触にかかわる遺跡は、剥片石器群から土器群への文化層の変化が確認できる遺跡である。こうした移行期の文化層は現在までにガエラン(Gaellan)貝塚で確認されている。

ガエラン貝塚は河口から四五キロメートル上流、カガヤン川東岸の河岸段丘上に位置し、淡水産一枚貝を主とする貝層から剥片石器や土器片、動物骨などが出土する。ラロ貝塚群を主体的に構成する淡水産二枚貝の生息域もこのあたりまでを上限としている。文化層はまず、シルト層から剥片石器群のみが出土する時期(第一期:四〇〇〇年前以前)が続ぎ、つぎに地表面下六〇センチから貝の堆積層が見られるようになる。貝層下部では剥片石器の出土が約四〇センチ続く(二層)。その上の二〇センチ厚の貝層(二層)から土器片が出土するようになる。これらの剥片石器はこの地域で一般的に出土する不定形なかたちをした剥片石器である。土器の出土は少量だが、ラロ貝塚群で初期の土器群である有文赤色スリップ土器群に類似した口縁部をもつ。

こうしたガエラン遺跡の遺物からは、剥片石器を使用していた狩猟採集社会がある時点からカガヤン川で産する淡水産二枚貝を採集し、生活していたこと、そしてそこに農耕民が到来したが、その後も貝を引き続き利用していたことがわかる。ガエラン貝塚以外に低地に立地し、剥片石器群を出土する遺跡は確認されていないが、より下流の、河岸から一キロ離れた、現在水田となっている低地には半径一〇メートル規模の貝塚が三ヶ所存在する。しかしこれらの貝塚遺跡からは動物骨以外に、剥片石器も土器片もほとんど検出されていない。未だ発掘調査や年代測定も行われていないので何も明確ではないが、かつてこのあたりがカガヤン川河岸に近かった頃に、狩猟採集民によって貝が利用されていた遺跡であった可能性が考えられる。

剥片石器群の時期に続く、有文赤色スリップ土器群の時期は約三四〇〇年前から四〇〇〇年前と考えているが、この時期の標識遺跡であるマガビット貝塚(Magabit)はカガヤン川河口から四〇キロ地点の、河岸に面した石灰岩台地上標高五〇メートルに位置し、他の貝塚同様、淡水産一枚貝で構成され、大量の有文赤色スリップ土器を出土する。磨製石器やシカ、イノシシなどの動物骨も出土するが、剥片石器は出土していない。そして現在までに有文赤色スリップ土器群を出土する遺跡は、マガビット遺跡よりも下流域では確認されていない。

つぎの有文赤色スリップ土器群の時期(約三四〇〇年前から三〇〇〇年前)には、遺跡はマガビット貝塚よりも下流の河岸段丘上に立地するようになる。しかしこの時期には貝塚が形成されていない。貝塚を形成する淡水産一枚貝が生息するカガヤン川の河床が砂から泥へと変化し、下流域の環境が沼地となったことが可能性として考えられる。しかしこの時期の遺跡はカガヤン川兩岸に広く分布するようになり、その後の黒色土器群期の貝塚遺跡と分布が重なっている。この時期の遺跡からは多くの土器片のほかに、わずかに数点の剥片石器が得られている。剥片石器はいずれも完成品のみで出土で



無文赤色スリップ土器群を出土する低地遺跡で製作されたものではない。限られた出土数ではあるが、石器のみが剥片石器を製作する集団から持ち込まれた可能性を示唆している。

いっぽう丘陵地帯では洞穴遺跡を中心とした調査を実施している。これまでの洞穴遺跡の発掘調査により、カガヤン川河岸から直線で東八キロメートルの標高五〇メートルに立地するマバゴッグ洞穴(Mabangog)で、低地貝塚と同じ貝種の淡水産一枚貝で構成される貝層中から剥片石器群と土器群が検出されている(Ogawa 1999)。一メートル、三〇センチ深度の調査規模であったが、四〇点の剥片石器と七〇点以上の土器片が出土した。層厚が薄いために遺物が混在していて、各土器群の文化層を明確に分けられない状況のなかで、有文と無文の赤色スリップ土器群の口縁部片が出土している。低地貝塚から、この洞穴のように剥片石器が土器群とともにまとまって出土した例はない。剥片石器群が狩猟採集民によって製作・使用・廃棄された道具であるとすれば、この洞穴は狩猟採集民によって営まれた遺跡である可能性が高い。そして石器といっしょに出土する土器や貝は、低地農耕社会との交換をおして入手したものと考えることができる。マバゴッグ洞穴の遺物出土状況は土層が薄いため、四つの土器群の各時期に対応するかたちで交流の時期を細かく明らかにできないが、長期にわたって低地と丘陵の集団が交流していたことを示している。

### 交換の痕跡

ラロ貝塚群における考古遺物の出土状況や遺跡分布のあり方は、狩猟採集社会と農耕社会の初期接触についてのモデルを未だ十分に検証できるものではないが、両者の交流の実態を徐々に明らかにしている。ガエラン貝塚の剥片石器群から赤色スリップ土器群への変化から予測されるように、農耕社会との接触以降、狩猟採集社会は低地から丘陵へと集落を移動し、熱帯雨林を資源とする生業活動を開始したものと考えられる。丘陵への集落の移動は、狩猟採集民が移動コストを抑えるための手段であり、農耕社会を社会的資源として利用し、両者間の交換を可能とする方策である。そしてその後の両者の相互関係は、低地の貝塚遺跡群から出土した剥片石器とマバゴッグ洞穴出土の土器群の出土状況にみられるように、長期にわたって継続したと予測できる。

また、貝塚を形成した人びとが摂取した食料の分析結果によると、シカやイノシシなどの陸上動物の摂取量が多かったことが判明している(小池裕子 一九九七私信)。これは貝塚中の埋葬址から出土した人骨に残るコラーゲンを同位体分析することによって明らかとなった。貝塚を形成した人びとであれば、当然、貝や魚など、水中の動物をより多く食べていたと予測されたが、実際には陸上動物を多く摂取していたことがわかった。こうした事実もまた、交換を介して農耕社会が狩猟採集社会からタンパク源(肉)を入手していた可能性を示唆している。

これまで考古学では、先史狩猟採集社会と農耕社会との相互関係が想定されてこなかった。その状況は農耕社会との接触以降の狩猟採集社会の歴史においても同様である。こうした研究状況にあって、本稿では考古学が得意としてきた経済的側面をベースとする技術・環境論だけではなく、資源や情報の交換によって始動する社会関係の再生産に着目した。具体的にはヨーロッパへの農耕伝播期における狩猟採集社会と農耕社会の初期接触のあり方についてのモデルを参照しながら、居住と移動にかかるコストをキー概念として考察を進めた。その結果、先史狩猟採集社会にとって隣人である農耕社会が新たな情報源となり、ある種の社会的資源として機能し、生業活動における移動コストを下げることに寄与したと予測することができた。

モデルの検証のための調査は現在もフィリピンのラロ貝塚群で継続中であるが、これまでの成果は、初期接触以降、狩猟採集社会の集落が丘陵地へ移動した可能性を示唆している。その後、狩猟採集社

会は石灰岩台地の熱帯雨林の資源を利用しながら、低地の農耕社会と食料や道具などを交換してきた  
様相をうかがうことができた。

初期接触期の後の狩猟採集社会と農耕社会の関係もまた、資源と生業に関する情報をめぐって社会的に規定される。その後、農耕社会の生産拠点が低地一帯へと拡大し、狩猟採集社会の主要な生業領域が熱帯雨林のなかへと変化していく背景には、政治経済的な不均衡状態が生み出されたことがうかがえる。その際にも資源と生業活動に関する情報の配分には農耕社会の政治経済的な意図が反映されていたと考えることができる。しかしこの問題に関しては今後の課題としたい。

## 謝辞

今回の執筆機会を与えてくださった池谷和信さんに深感謝いたします。本研究はフィリピン国立博物館と日本人研究者との共同で実施されている研究成果に基づいている。また本研究は以下の研究助成により実施が可能となった。平成十五、十六年度文部科学省科研費基盤研究A(「北部ルソン島ラロム塚群の発掘調査―先史狩猟採集社会と農耕社会の相互関係の解明」課題番号 15251005、小川英文研究代表者)、特定領域研究「資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築」領域番号 606、内堀基光領域代表者)計画研究「生態資源の選択の利用と象徴化の過程」(課題番号 14083207、印東道子研究代表者)、平成十四、十五年度高梨学術奨励基金研究助成「カガヤン河下流域における貝塚遺跡群出土土器の編年的研究」(小川英文研究代表者)。

## 註

(1)ヨーロッパへの農耕の伝播は西アジアを基点として東から西へと広がっていった。農耕社会はその先進性と生産性の優位によって、八〇〇年前から約三〇〇〇年の間にヨーロッパ全域へと波状に広まっていったと考えられてきた(Ammerman and Cavalli-Sforza 1971)。そのためヨーロッパの農耕伝播のあり方は「先進の波(Wave of Advance)」と呼ばれている。しかし現在では、あたかもヨーロッパの狩猟採集社会が農耕の波に対して抵抗の痕跡も残さず、社会の置換があったかのような錯覚を起させる「先進の波論」に多くの疑問が投げかけられており、実際は緩やかに農耕社会へと変わっていったのではないかと考えられるようになってきている(Zvelebil and Zvelebil 1989)。「先進の波」論では、農耕技術の先進性ゆえに、それよりも劣った技術体系にある狩猟採集社会は当然、進んだ技術を受容し、自らも進んで農耕民となることを望んだという説明がなされ、ここでは農耕社会は「無主の地」を占拠する近代の植民者のように描かれている。

## 文献目録

池谷和信

2002 『国家のなかでの狩猟採集民―カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』、国立民族学博物館研究叢書 4

小川英文

1996 「狩猟採集民ネグリのトの考古学―共生関係が提起する諸問題」、スチュアート・ヘンリ編『採集狩猟民の現在』: 183-222、言叢社

2000 「狩猟採集社会と農耕社会の交流―相互関係の視角―」、小川英文編『交流の考古学』: 266-295、朝倉書店

2004 「山口貝塚群出土土器群の埋没学的編年研究」、『長野県考古学雑誌』 105: 1-33.

Ammerman, A. L. and L. L. Cavalli-Sforza

1971 Measuring the rate of spread of early farming in Europe. *Man* 6: 674-688.

Deniel, R. W.

11

- 1985 The Hunter-Gatherer / Agricultural Frontier in Prehistoric Temperate Europe. In S. W. Green and S. M. Perlman (eds.) *The Archaeology of Frontier and Boundaries*: 113-139. New York: Academic Press.
- Headland, T. N. and R. C. Bailey  
1991 Introduction: Have Hunter-Gatherers Ever Lived in Tropical Rain Forest Independently of Agriculture? *Human Ecology* 19:2: 115-122.
- Headland, T. N. and L. A. Reid  
1989 Hunter-gatherers and their neighbor from prehistory to the present. *Current Anthropology* 30: 43-66.
- Heine-Geldern  
1932 Urheimat und früheste Wanderungen der Austronesier. *Anthropos* 27: 543-619.
- Hutterer, K.  
1982 Interaction between Tropical Ecosystem and Human Foragers: Some General Considerations. Working Paper. Environment and Policy Institute, East-West Center. Honolulu.
- Moore, J. A.  
1985 Forager / Farmer Interactions: Information, Social Organization, and the Frontier. In S. W. Green and S. M. Perlman (eds.) *The Archaeology of Frontier and Boundaries*: 93-112. New York: Academic Press.
- Ogawa, H.  
1999 Excavation of the Mabangog Cave, San Mariano, LaLio, Cagayan, Philippines. 『 東南アジア』 19: 93-114.
- Peterson, J. T.  
1978 *The Evolution of Social Boundary*. Chicago: University of Illinois Press.
- Peterson, J. T. and W. Peterson  
1977 Implications of Contemporary and Prehistoric Exchange Systems. In J. Allen, J. Golson and R. Jones (eds.) *Sunda and Sahul*: 567-599. New York: Academic Press.
- Snow, B. E., R. Shutler, D. E. Nelson, J. S. Vogel and J. R. Southon  
1986 Evidence of Early Rice Cultivation in the Philippines. *Philippine Quarterly of Culture and Society* 14: 3-11.
- Zvelebil, M. and K. V. Zvelebil  
1988 Agricultural Transition and Indo-European Dispersals. *Antiquity* 62: 574-583.